



「平家物語」は、どんな物語なの



へいし はんえい
平氏の繁栄から、ほろびるまでをえがいた、軍記
さいこうけっさく
物語の最高傑作だよ。

軍記物語の最高傑作といわれる

「平家物語」は、鎌倉時代初期につくられた物語で、軍記物語の最高傑作といわれています。特に最初の、「祇園精舎の鐘の声 諸行無常の響あり 沙羅双樹の花の色 盛者必衰の理を顕す」の文が有名です。原作は3巻と見られ、13世紀の初めにできたようですが、その後、内容が改められたり、追加されたりして、1330年代に、13巻の物語になったようです。原作者は信濃前司行長（藤原行長）といわれていますが、はっきりしていません。びわ法師が、びわを伴奏に、特殊な節をつけて語って、広めました。

1～12巻は、平氏の繁栄から、ほろびるまでをえがいた

「平家物語」の1～12巻では、平氏の繁栄から、ほろびるまでの運命を主題にしながら、当時の人々の勇ましさと悲しさ、美しさとみにくさ、強さと弱さをえがき出しています。そのうち1巻から5巻の初めまでは、繁栄する平氏が、平氏をたおそうとする運動を起こされながら、切り抜けていくようですが、語られています。その後から12巻までは、平氏が、源氏の攻撃を支えきれずに、瀬戸内海沿岸を転々とし、ついには壇ノ浦でほろびるまでが、語られています。

13巻は、建礼門院のその後の物語

13巻は「灌頂巻」とよばれ、平氏がほろびた後、生き残り、尼僧となって、京都の大原に住んだ建礼門院（平清盛の娘徳子、安徳天皇の母）の、その後の物語です。

ことばの意味 軍記物語 中世の戦争を題材にして、その中に生きる人々をえがいた物語。